

# 課題研究論文

チャンピオンスポーツと学生スポーツ

## 特集にあたって

2009年12月25日、政府が決定した2010年度予算案において、文部科学省のスポーツ関連予算が提示された。その概要は、事業仕分けの対象となった日本オリンピック委員会（JOC）や日本体育協会への補助金が削減される一方で、国際競技力向上に重点を置いた支援策「競技力向上プロジェクト」に前年度の約4倍にあたる24.1億円を計上し、その中でもオリンピックでのメダル獲得が有力視されている競技・種目を重点的に支援する「チームニッポン マルチ・サポート事業」には、前年度の約6倍にあたる18.8億円が盛り込まれるなど、トップスポーツ・アスリート強化を明確に打ち出したものとなっている。

省みれば1988年のソウルオリンピック以降、わが国の国際競技力は長期にわたって低迷傾向にある。このような状況を打破するために、競技スポーツに関する国レベルの強化施策として「スポーツ振興基本計画（2000年）」の策定、さらにはその政策目標を達成すべく、JOCを中心として「GOLD PLAN（2001年）」・「競技者育成プログラム（2001年）」等が発動され、競技者および競技（チャンピオンスポーツ）の育成強化に当たってきた。しかしながら、今日に至るまで一部の競技を除き、チャンピオンスポーツを取り巻く環境は依然万全とは言えないことに加え、多くの競技においては未だ試行錯誤が続いているのが現状である。

今年度、競技スポーツ学科は「勝つこと」という壮大なテーマを掲げ、本学の教育研究活動に取り組み始めた。我々は、「勝つこと」とは「ゲーム・レースに勝つこと」のみならず、競い合うことを通じて「向上する」「高め合う」「克服する」ことも含む、と定義づけている。今回、課題研究のキーワードとして「チャンピオンスポーツと学生スポーツ」を設定したところ、コーチングコースを主体として6編の貴重な知見が寄せられた。本学の主要競技種目のコーチ陣9名によるディスカッションを的地（スポーツビジネスコース）がまとめ、陸

上競技 長距離・バレーボール・バスケットボール・水泳・柔道（掲載順）のコーチ5名が本学の現状を分析し、アスリート・コーチとしての豊富な経験をふまえてそれぞれの論を展開した。

プロスポーツ・アスリートとはある意味一線を画す学生スポーツ・アスリートに対し、開学8年目を迎える日本で唯一のスポーツ大学として、あるいはそのスタッフとして、どのように志向し、そして取り組むのか。わが国の国際競技力の向上施策同様、早急かつ適確な対応（実践と社会への発信）が望まれるところである。

渋谷 俊 浩